(原子力発電所)資料4-1

柏崎刈羽原子力発電所 6号炉及び7号炉

基準地震動の策定について

【ご指摘事項及び確率論的地震ハザードについて】

平成28年1月29日 東京電力株式会社



本日ご説明する内容

		内容	説明概要	ページ
1	H27 8/28	番神砂層・古安田層の密度の設定値について, 調査結果との対応関係を示すこと。	・既往の調査結果との整合性について確認した結果をご説明。	8
2	H27 12/2	吉田ほか(2005)を参考に,地表の影響について 確認すること。	 ・統計的グリーン関数法による評価に併せ、はぎとり解析に用いる地盤モデルを組み合わせた全体モデルを作成し、地表の影響について確認した結果をご説明。 ・全体モデル、分割モデルのいずれで評価した場合においても大きな違いがないことをご説明。 	11~13
3	H27 11/11	長岡平野西縁断層帯による地震の断層モデルを 用いた手法による地震動評価において、大湊側 のEW方向が荒浜側と比較して最大加速度値が大 きくなっていることについて解説を加えること。	 ・極短周期側の成分については、大湊側EW方向が極短周期側で大きい要素地震を選定したため、評価結果として最大加速度値の違いが生じたものと考えらえる。 ・その他の要素地震では、短周期成分が同レベルのものもあり、選択した要素地震の特徴と考えられる。 	15~18
4	H27 12/2	震源を特定せず策定する地震動において,地震 基盤から解放基盤表面までの伝播特性をどのよ うに考えるかについて,考え方が明確になるよ う記載方法を見直すこと。	 記載の見直し。 	29
5	H27 11/11	基準地震動の時刻歴波形について,変位波形を 示すこと。	・基準地震動の時刻歴波形について、加速度・速度・変位の時刻歴波形を 記載。	44~58
6	H27 12/2	確率論的地震ハザードについて説明すること。	・確率論的地震ハザードの評価内容についてご説明。	60~77



※安田層下部層のMIS9~MIS7の堆積物については、本資料では『古安田層』と仮称する。



1.	はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について	P. 3
2.	吉田ほか(2005)を踏まえた検討について	P. 10
З.	長岡平野西縁断層帯による地震の評価結果について	P. 14
4.	2004年北海道留萌支庁南部地震の評価について	P. 19
5.	基準地震動Ssの時刻歴波形について	P. 32
6.	確率論的地震ハザードの評価内容について	P. 59



- 1. はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について
- 2. 吉田ほか(2005)を踏まえた検討について
- 3. 長岡平野西縁断層帯による地震の評価結果について
- 4. 2004年北海道留萌支庁南部地震の評価について
- 5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について
- 6. 確率論的地震ハザードの評価内容について



1. はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について



1. はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について 1号機地盤系 地下構造モデルの同定

 観測記録による伝達関数に対し、重複反射理論に基づく逆解析により地下構造 モデルを同定。
 逆解析には遺伝的アルゴリズムを用い、S波速度及び減衰を同定。

(層厚,密度はPS検層結果で固定)

	固定パラメータ			初期 モデル	同定結果		
	T.M.S.L.	層厚 ^{※1}	密度 ^{※2}	S波速度 ^{%1}	S波速度	S波速度	
	(m)	(m)	(g/cm ³)	(m/s)	(m/s)	h ₀	α
_	+5.0						
表層 ∫	+3.0	2.0	2.00	200	100	0.2	0.9
(置換砂)		4.0	2.00	300	180	0.2	0.9
古安田層	-15.0	14.0	1.76	280	270	0.2	0.9
	-40.0	25.0	1 70	500	420	0.2	0.9
	-67.0	27.0	1.72		430	0.2	0.9
	-122.0	55.0	1 72	540	520	0.2	0.9
西山層 <	-148.0	26.0	1.72	540	520	0.2	0.9
	-230.0	82.0	1.72	650	730	0.2	0.9
	200.0	20.0	1 72	700	820	0.2	0.9
l	-250.0	_	1.72	700	020	0.2	0.9

● 地震計設置位置

※1:鉛直アレイ観測点のPS検層結果による。

※2:1号機の炉心周辺におけるボーリングによる設定値を参照。





100

同定した地下構造モデルの理論伝達関数(赤)と 観測記録による伝達関数(黒)の比較



1. はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について 5号機地盤系 地下構造モデルの同定

 観測記録による伝達関数に対し、重複反射 理論に基づく逆解析により地下構造モデル を同定。
 逆解析には遺伝的アルゴリズムを用い、S 波速度及び減衰を同定。(層厚,密度は PS検層結果で固定)













	固定パラメータ		-タ	初期モデル	同定結果			
	T.M.S.L.	層厚*1	密度 ^{※2}	S波速度 ^{%1}	S波速度	減衰 h(f)	減衰 h(f)=h ₀ ×f⁻ɑ	
	(m)	(m)	(g/cm ³)	(m/s)	(m/s)	h _o	α	
	+12.0							
≠⊠ √	+9.3	2.7	2.00	160	180	0.8	0.1	
衣眉	12.0 7	7.3	2.00 100		210	0.2	0.85	
古安田層 丨	16.6	18.6	1.78	390	310	0.2	0.85	
	-10.0	7.4	1 70	500	420	0.2	0.85	
売山層 く	-33.0	9.0	1.70	500	420	0.2	0.85	
CU/e	-33.0	33.0	1.75	540	440	0.2	0.85	
Ļ	-00.0	22.0	1.75	550	550	0.2	0.85	
	-88.0	12.0	4.04	660	640	0.1	0.85	
		20.0	1.84		640	0.1	0.85	
	-120.0	29.0	2.03	770	730	0.1	0.85	
J	-149.0	31.0	0.00	0.40	000	0.1	0.85	
椎谷層	-180.0	51.0	2.03	840	890	0.1	0.85	
	-231.0	35.0	2.03	860	960	0.1	0.85	
	-200.0	34.0	2.03	870	1000	0.1	0.85	

也震計設置位置

※1:鉛直アレイ観測点のPS検層結果による。

※2:5号機炉心周辺におけるボーリングによる設定値を参照。



复京電力

1. はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について 密度の設定(1号機及び5号機の炉心付近における調査結果)

鉛直アレイ地点の密度は以下に示す炉心周辺のボーリング孔及び地表より採取した試料に基づく物理試験結果に基づき設定。





1. はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について 地下構造モデルの妥当性確認



1. はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について

- 2. 吉田ほか(2005)を踏まえた検討について
- 3. 長岡平野西縁断層帯による地震の評価結果について
- 4. 2004年北海道留萌支庁南部地震の評価について
- 5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について
- 6. 確率論的地震ハザードの評価内容について



2. 吉田ほか(2005)を踏まえた検討について

吉田ほか(2005)では、表層の地震応答解析用の入力地震動を設定する方法として、表層の存在を無視し、工学的基盤を解放基盤として地震動を設定する方法の妥当性を検証。結論として、地震動を設定する場合には、表層の存在を意識しておく必要があると指摘している。
 現状の地震動評価では、解放其般素面において基準地震動を策定し、送知エデルにつわし、施設へのついた。

現状の地震動評価では、解放基盤表面において基準地震動を策定し、浅部モデルに入力し、施設への入力地震動を算定。(深部と浅部を分けた「分割モデル」による分割解析)

- 吉田ほか(2005)を踏まえ、地震基盤~地表までの「全体モデル」を用いた一体解析と、現状の地震動 評価で実施する分割モデルを用いた分割解析の結果を比較する。
- 浅部モデルは、はぎとり解析に用いるモデル、深部モデルは統計的グリーン関数法に用いるモデルとし、 解放基盤表面位置で接続して全体モデルを設定。
- 地震基盤への入力波は、シミュレーション解析結果の地震基盤波とする。



※「統計的グリーン関数に用いるモデル」については、第279回審査会合資料1参照

東京電力

U

TERCO

2. 吉田ほか(2005)を踏まえた検討について 2.1 2007年新潟県中越沖地震のシミュレーション解析結果を用いた検討

- 2007年新潟県中越沖地震のシミュレーション解析結果の地震基盤波(EW方向)を入力とし、「全体 モデル」と「分割モデル」の地表応答と地震基盤~地表の増幅率を比較して示す。
- 長周期側において「分割モデル」の卓越周期が若干短周期側にシフトするものの、主要周期帯における 両者の違いは小さいことが確認できる。
- この要因は、吉田ほか(2005)に指摘される通り、敷地の地震基盤が約6kmと深いのに対して、解放基盤深さが荒浜側はT.M.S.L.-284m、大湊側はT.M.S.L.-134mと浅いことが考えられる。



吉田ほか(2005)を踏まえた検討について 2.2 2004年新潟県中越地震のシミュレーション解析結果を用いた検討



- 1. はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について
- 2. 吉田ほか(2005)を踏まえた検討について
- 3. 長岡平野西縁断層帯による地震の評価結果について
- 4. 2004年北海道留萌支庁南部地震の評価について
- 5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について
- 6. 確率論的地震ハザードの評価内容について



3. 長岡平野西縁断層帯による地震の評価結果について

長岡平野西縁断層帯による地震の断層モデルを用いた手法による地震動評価結果から策定した基準地震動Ss-4~7において、EW方向の最大加速度値が荒浜側と比較して大湊側が大きい傾向にあったことを踏まえ、要素地震の特徴を確認。

	した した した した した した した した した した									
基準 地震動	検討用地震		最大加速度值(cm/s ²)							
				荒浜側		大湊側				
			NS方向	EW方向	UD方向	NS方向	EW方向	UD方向		
Ss-4		応力降下量1.5倍	589	574	314	428	826	332		
Ss-5	長岡平野西	断層傾斜角35°	553	554	266	426	664	346		
Ss-6	移動層市による地震	連動+応力降下量1.5倍	510	583	313	434	864	361		
Ss-7		連動+断層傾斜角35°	570	557	319	389	780	349		

	■ 中 震 の	越地震の の候補と 観測記録	余震の	うち, 要 出した4 時徴を整	·索地 ·地震 ·理。
37°	30. 柏	崎刈羽原子九	D発電所 ④2	2004/11/08	3 1 1:15
37°	20'.	/ 22004	4/10/25 00 3 19:46 3 2 32	3:04 004/10/27	10:40
37°	10'.	中越	地震の推定	断層面	
ð	138°30' 東京	138° 40' 配力	138° 50'	139° 00'	139° 10'

TRECO

1	No.	1	2	3	4	備考
発生日時		2004/10/23 19:46	2004/10/25 06:04	2004/10/27 10:40	2004/11/8 11:15	気象庁
マク゛ニ	Mi	5.7	5.8	6.1	5.9	気象庁
チュート゛	M _w	5.5	5.6	5.8	5.5	F-net
震源	東経(°)	138.83	138.90	138.99	138.99	神原ほか(2006)*
位置	北緯(°)	37.31	37.34	37.31	37.41	神原ほか(2006)※
雨沥辺	□ □→ (1)	12.35	15.20	11.60	0	気象庁
長 源>	ŧс(кm)	8	14	11	5	F-net
走	í (°)	16;217	215;29	218;18	13;209	F-net
傾急	斜(°)	52;40	53;37	60;32	53;38	F-net
すべい	り角(°)	76;107	94 ; 85	100;73	80;103	F-net
地震モーメント(N·m)		1.8×10 ¹⁷	2.5×10 ¹⁷	6.3×10 ¹⁷	2.2×10 ¹⁷	F-net
]-ナ-周波数(Hz)		0.6	0.6	0.4	0.6	神原ほか(2006)
実効応	iカ(MPa)	8.2	11.4	8.7	10.4	神原ほか(2006)

抽出した要素地震の候補

※ただし、日本測地系の座標を世界測地系に変換

3. 長岡平野西縁断層帯による地震の評価結果について 選定した要素地震の特徴(要素地震の他候補との比較)

要素地震の候補として抽出した地震観測記録の加速度時刻歴波形及び擬似速度応答スペクトルを比較。



■要素地震として選定した③,④のEW方向については、短周期側で大湊側>荒浜側の傾向にあり、経験的 グリーン関数の結果に影響を与えたものと考えられる。ただし、その他の記録では、このような傾向は 認められない。

3. 長岡平野西縁断層帯による地震の評価結果について 選定した要素地震の特徴(他の鉛直アレイ観測記録との比較)





東京電力

3. 長岡平野西縁断層帯による地震の評価結果について 荒浜側・大湊側の評価結果の比較

長岡平野西縁断層帯による地震の断層モデルを用いた手法による地震動評価結果から策定した基準地震動Ss-4~7について、荒浜側と大湊側の地震動レベルについて確認。
 EW方向の極短周期側では、要素地震の特徴を反映し、大湊側がやや大きく、最大加速度値が大きくなっている傾向が認められる。



基準地震動Ss-4~Ss-7の設計用応答スペクトルの比較(赤線:荒浜側,青線:大湊側)

EW方向の極短周期側では、要素地震の特徴を反映し、大湊側がやや大きく、最大加速度値が大きくなっている傾向が認められる。
 しかしながら、要素地震の特徴に関しては、その他の地震の観測記録と比較しても概ねばらつきの範囲にあり、特異なものではないと考えられる。

東京電力

- 1. はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について
- 2. 吉田ほか(2005)を踏まえた検討について
- 3. 長岡平野西縁断層帯による地震の評価結果について
- 4. 2004年北海道留萌支庁南部地震の評価について
- 5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について
- 6. 確率論的地震ハザードの評価内容について



4. 2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 基盤地震動の検討

- 佐藤ほか(2013)では、K-NET観測点のHKD020 港町について、GL-6mまでの室内試験結果を考慮した非線形解析を行い、GL-41mの基盤面における基盤地震動を評価している(GL-6m以深は線形解析を仮定、減衰定数は1%に設定)。
- 上記の基盤地震動の評価結果について検証するため、以下の検討を実施する。
 ①佐藤ほか(2013)の報告時点以降に得られた、GL-6mからGL-41mまでの室内試験結果を用い、GL-41mまで非線形性を考慮して基盤地震動(水平方向)を評価。
 - 2不確かさを考慮した基盤地震動の評価として、GL-6mまで非線形、GL-6m以深は減衰定数を3% として基盤地震動(水平方向)を評価。
 - ③佐藤ほか(2013)の報告時点以降に得られたPS検層の再測定結果から,地盤モデルを変更して基盤 地震動(鉛直方向)を評価(解析方法は佐藤ほか(2013)と同様)。
 - ④HKDO2O 港町における地下水位の状況を踏まえ、GL-6mまではポアソン比一定、GL-6m以深は体積弾性率一定として基盤地震動(鉛直方向)を評価。

⑤柏崎刈羽原子力発電所における地盤物性の影響を考慮し基盤地震動(水平方向・鉛直方向)を評価。



2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 4. 基盤地震動の検討 検討(1)



東京電力 θ

0.4

0.2

泥岩2 追加の室内試験による地盤の非線形特性

Shear strain y

1.091

0.01

0.0001

8,18 귫

44

0.05

0.1

000

7

6.18

0.1 3

0.05

1.1

0.001

Shear strain y 砂岩2

UNOR

104

6.2

4. 2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 基盤地震動の検討 検討①

GL-6mからGL-41mの地盤の非線形特性と減衰定数を変動させて、等価線形解析により深さ41mでの基盤地震動を評価。

地表観測記録を入力として、GL-41mまで非線形性を考慮した等価線形解析から、GL-41m(Vs=938m/s)における基盤地震動を評価。



S波速度 Vs(m/s)	密度 <i>p</i> 〈1000kg/m ¹ 〉	層厚 H(m)	減衰定数h (初期值)	非線形特性
200	1.9	0.5	0.02	砂
200	2.0	0.5	0.03	確混じり砂
200	2.0	1	0.02	發1
290	2.0	1	0.01	禄2
290	2.0	1	0.01	風化砂岩1
370	2.0	1	0.01	嵐化砂岩2
400	2.0	1	0.02	砂岩1
473	2.0	1	0.02	砂岩1
549	2.0	3	0.02	砂岩1
549	2.0	2	0.01	泥岩1
549	2.0	1	0.03	鎌岩
549	2.0	0.5	0.01	泥岩1
549	2.0	2.5	0.01	砂岩2
604	2.06	7	0.01	砂岩2
653	2.06	18	0.015	泥岩2
938	2.13	17	0.01	-

等価線形解析に用いる地盤モデル



等価線形解析の条件

- ✓ 有効ひずみγ_{eff} = 0.65 γ_{max}
- ✓ 収束判定値(前のモデルとの差異):1%以内
- ✓ 最大繰り返し計算回数:30回

4. 2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 基盤地震動の検討 検討①

■ GL-41mまで非線形性を考慮した基盤地震動の最大加速度は561cm/s²となっており、佐藤ほか (2013)による基盤地震動 (585cm/s²) と比較すると、やや小さい。

■ GL-41mまで非線形性を考慮した基盤地震動の応答スペクトルは,佐藤ほか(2013)による応答スペクトルとほぼ同程度となっている。



擬似速度応答スペクトルの比較



4. 2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 基盤地震動の検討 検討①



収束物性値、最大加速度及び最大ひずみの深さ分布

■ GL-41mまで非線形性を考慮した基盤地震動評価に用いた収束物性 値による伝達関数は、佐藤ほか(2013)の物性値による伝達関数と 比較して、GL-6mよりも深部の減衰定数が1%から5%程度になっ たことにより、10Hzより高振動数側で小さくなっている。

検討①のまとめ

- 2004年北海道留萌支庁南部地震におけるHKDO20 港町の観測記 録について、追加の室内試験結果を用い、GL-41mまで非線形性 を考慮して基盤地震動を評価。
- 基盤地震動の最大加速度は561cm/s²となっており、佐藤ほか (2013)による基盤地震動(585cm/s²)と比較してやや小さく評価されている。また、基盤地震動の応答スペクトルは、佐藤ほか (2013)による応答スペクトルとほぼ同程度となっている。



収束物性値による伝達関数とH/Vスペクトルの比較

東京電力

4. 2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 基盤地震動の検討 検討②

検討②:減衰定数の不確かさ考慮

佐藤ほか(2013)の地盤モデルに基づき、 GL-6mまで非線形、GL-6m以深を減衰定 数3%として基盤地震動を評価し、佐藤ほか (2013)の評価結果と比較。



S波速度 Vs(m/s)	密度 p (1000kg/m ²)	層厚 H(m)	減衰定数h (初期值)	非線形特性
200	1.9	0.5	0.02	砂
200	2.0	0.5	0.03	確定じり砂
200	2.0	1	0.02	保1
290	2.0	t	0.01	槑2
290	2.0	1	0.01	風化砂岩1
370	2.0	1	0.01	風化砂岩2
400	2.0	1	0.01	風化砂岩2
473	2.0	1	0,03	-
549	2,0	3	0.03	_
549	2.0	2	0.03	<u> </u>
549	2.0	1	0.03	-
549	2.0	0.5	0.03	-
549	2.0	2.5	0.03	-
604	2.06	7	0.03	
653	2.06	18	0.03	
938	2.13	17	0.03	-

等価線影解析に用いる地盤モデル







加速度時刻歴波形の比較

● 東京電力

4. 2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 基盤地震動の検討 検討②

収束物性値による伝達関数は、佐藤ほか(2013)の物性値による伝達関数と同様に、本震時のH/Vスペクトルの特徴をよく再現していると考えられる。



検討②のまとめ

東京電力

収束物性値による伝達関数とH/Vスペクトルの比較



4. 2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 基盤地震動の検討 検討③

検討③:地盤モデル変更による基盤地震動(鉛直方向)評価

- 佐藤ほか(2013)における鉛直方向の基盤地震動の評価結果は、物理探査学会 (2013.10)時点での地盤モデルに基づいていたが、笹谷ほか(2008)による位相 速度を説明できないことから、佐藤ほか(2013)の報告時点以降に、表層部分の PS検層を再測定している。
- 再測定結果によるGL-6mまでのP波速度は、佐藤ほか(2013)の地盤モデルと異なるため、再測定結果を反映した地盤モデルにより、鉛直方向の基盤地震動を再評価。

※再測定結果によるS波速度は、佐藤ほか(2013)の地盤モデルとほぼ同様のため変更していない。

PS検層の再測定結果を反映した地盤モデルを用い、体積弾性率一定としてGL-41mの鉛直方向の基盤地震動を評価した結果、その最大加速度は306cm/s²となり、佐藤ほか(2013)による基盤地震動(296cm/s²)と比較すると、やや大きい。



- 検討③のまとめ
- 佐藤ほか(2013)のHKD020 港町のP波速度モデルは、笹谷ほか(2008)による位相速度を説明できないことから、表層部分のPS検層を再測定し、再測定結果を反映した地盤モデルを設定。
- 上記地盤モデルを用い,体積弾性率一定としてGL-41mの鉛直方向の基盤地震動を評価した結果,その 最大加速度は306cm/s²となり,佐藤ほか(2013)による基盤地震動(296cm/s²)と比較すると,や や大きい。

HKD020

佐藤ほか(2013) PS株羅(熱環理会学会

1000 1500 2000 2500

道加補料() PS稿酬(再测定)

500

360 457.

Depth (m) 52 52

4. 2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 基盤地震動の検討 検討④

検討④:GL-6mまでポアソン比一定とした基盤地震動(鉛直方向)評価

■ 佐藤ほか(2013)及び追加検討③における鉛直方向の基盤地震動は、体積弾性率一定として評価しているが、地下水位の状況を踏まえ、GL-6mまでポアソン比一定、GL-6m以深を体積弾性率一定とした場合の鉛直方向の基盤地震動を評価。



検討④のまとめ

東京電力

- ■地下水位の状況を踏まえ、GL-6mまでポアソン比一定、GL-6m以深を体積弾性率一定とした場合の鉛 直方向の基盤地震動を評価。
- GL-41mの基盤地震動を評価した結果、その最大加速度は262cm/s²となり、体積弾性率一定と仮定した結果(306cm/s²)は保守的な結果となっている。

4. 2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 基盤地震動の検討 検討⑤

■ 柏崎刈羽原子力発電所における地盤物性の影響を評価。

■ 佐藤ほか(2013)によるHKDO2O港町観測点の基盤地震動は、地表観測記録に基づきGL-41mの Vs=938m/sの基盤層において評価されている。柏崎刈羽原子力発電所における解放基盤表面のS波速度 は荒浜側・大湊側ともにVs=700m/sと設定しているため、これらの地盤物性の影響を評価する。

- 一方,地震基盤から解放基盤表面までの伝播特性に関しては、柏崎刈羽原子力発電所の敷地周辺及び敷地内の地下構造の影響により地震波の到来方向により異なることが明らかとなっている。しかし、HKDO2O港町観測点のやや深部の伝播特性に関しては十分に明らかとなっていないものと考えられる。
- そこで「震源を特定せず策定する地震動」の候補としては、HKDO2O港町観測点の伝播特性が含まれたままの 佐藤ほか(2013)による基盤地震動を重視し、これに対 する不確かさ等を考慮した検討結果を参照して設定する こととする。
- さらには、はぎとり解析の不確かさ等を考慮して最大加速度値を示すケースを考慮することにより保守的に設定することとする。
- なお、柏崎刈羽原子力発電所の敷地周辺及び敷地内の地 下構造の影響については、「敷地ごとに震源を特定して 策定する地震動」の評価において適切に反映している。

東京電力



HKD020(港町)におけるPS検層結果と 既往の研究によるS波速度構造モデル

29

4. 2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 基盤地震動の検討 検討⑤

敷地において解放基盤表面までモデル化された1次元地下構造モデルにより地盤物性の影響を評価する。
 荒浜側の1次元地下構造モデルは、褶曲構造の影響により評価精度が低いと考えられるため、大湊側の1次元地下構造モデルを参照する。なお、荒浜側の1次元地下構造モデルにおいては解放基盤表面のVsは1,100m/sであるため、これによると地盤物性による補正の必要はないものと考えられる。
 補正にあたり、HKDO2O港町観測点の基盤層のVs=938m/sに近いVs=960m/s層の上面に、はぎとり解析の不確かさ等を考慮した基盤地震動(水平:609cm/s²,鉛直:306cm/s²)を入力し、Vs=730m/sの解放基盤表面の応答を評価した。

地下構造モデル

※SGFによる評価に用いた地下構造モデル

荒浜側

層No.	T. M. S. L. (m)	層厚 (m)	密度 (t/m ³)	Vs (m/s)	Vp (m/s)	Q (-)	
	-284						
1	-300	16	2.11	1110	2280	50f	
2	-1360	1060	2.12	1160	2390	50f	
3	-2410	1050	2.25	1620	3220	50f	
4	-3700	1290	2.36	2050	4150	50f	
5	-5880	2180	2.51	2760	4820	50f	
6	-	-	2. 59	3170	5230	-	地震基盤

大湊側

<u> </u>							
層No.	T. M. S. L. (m)	層厚 (m)	密度 (t/m ³)	Vs (m/s)	Vp (m/s)	Q (-)	
	-134						
1	-149	15	2.03	730	1800	50f	
2	-180	31	2.03	890	1900	50f	እታ
3	-231	51	2.03	890	1900	50f	位置
4	-266	35	2.03	960	1900	50f	
5	-300	34	2.03	1000	2100	50f	
6	-1360	1060	2.12	1160	2390	50f	
7	-2410	1050	2.25	1620	3220	50f	
8	-3700	1290	2.36	2050	4150	50f	
9	-5880	2180	2.51	2760	4820	50f	
10	-	-	2.59	3170	5230	-	地震基盤

4. 2004北海道留萌支庁南部地震の評価について 基盤地震動の検討 検討⑤

■ 敷地における地盤物性を考慮したところ,解放基盤表面の地震動は,水平方向:643cm/s²,鉛直方向310cm/s²と評価された。



東京電力

- 1. はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について
- 2. 吉田ほか(2005)を踏まえた検討について
- 3. 長岡平野西縁断層帯による地震の評価結果について
- 4. 2004年北海道留萌支庁南部地震の評価について
- 5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について
- 6. 確率論的地震ハザードの評価内容について



5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 敷地ごとに震源を特定して策定する地震動による基準地震動

敷地ごとに震源を特定して策定する地震動として「F-B断層による地震」,「長岡平野西縁断層帯による地震」の応答スペクトルに基づく地震動評価及び断層モデルを用いた手法による地震動評価の結果を踏まえて基準地震動Ss-1~7を策定。
 設計用応答スペクトル、模擬地震波を設定。

【敷地ごとに震源を特定して策定する地震動による基準地震動の最大加速度値】

++ >#				最大加速度值 (cm/s ²)					
基準		検討用地震					大湊側		
地展到				NS方向	EW方向	UD方向	NS方向	EW方向	UD方向
Ss-1	F-B断層	应 基	答スペクトルに づく地震動評価	2300		1050	1050		650
Ss-2	による地震 断層		Eデルを用いた手法 よる地震動評価	1240	1703	711	848	1209	466
Ss-3		応答スペクトル に基づく地震動 評価	応力降下量1.5倍及び断層傾 斜角35°ケースを包絡	600		400	60	00	400
Ss-4	長岡平野西		応力降下量1.5倍	589	574	314	428	826	332
Ss-5	縁断層帯に よる地震	断層モデルを用	断層傾斜角35°	553	554	266	426	664	346
Ss-6		101にナムによる 地震動評価	連動+応力降下量1.5倍	510	583	313	434	864	361
Ss-7			連動+断層傾斜角35°	570	557	319	389	780	349






5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 敷地ごとに震源を特定して策定する地震動による基準地震動 海域の連動

■ 佐渡島南方~F-D~高田沖~親不知海脚西縁~魚津断層帯による地震の地震動評価結果は、基準地震動 Ss-1~Ss-7を著しく超過する地震動レベルではなく、敷地における基準地震動の策定に大きな影響を 与えるものではないと考えられる。





基準地震動Ssの時刻歴波形について 5. 敷地ごとに震源を特定して策定する地震動による基準地震動 模擬地震波

荒浜側

加速度(cm/s²)

東京電力

2000

1000

-1000

-2000









加速度(cm/s²)

150

120









38

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 敷地ごとに震源を特定して策定する地震動による基準地震動 模擬地震波

荒浜側



基準地震動Ssの時刻歴波形について 5. 敷地ごとに震源を特定して策定する地震動による基準地震動 模擬地震波



東京電力

















加速度(cm/s²)





5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 敷地ごとに震源を特定して策定する地震動による基準地震動 模擬地震波

大湊側







5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動の策定 基準地震動の一覧

東京電力

敷地ごとに震源を特定して策定する地震動として「F-B断層による地震」,「長岡平野西縁断層帯による地震」の応答スペクトルに基づく地震動評価及び断層モデルを用いた手法による地震動評価の結果を踏まえて基準地震動Ss-1~7を策定。
 震源を特定せず策定する地震動として,2004年北海道留萌支庁南部地震を考慮した地震動を踏まえて、大湊側において基準地震動Ss-8を策定。

++ \/					最	大加速度低	直(cm/s ²)	
□ 基準 □ 地震動		検討月	用地震		荒浜側 大湊		大湊側	IJ	
		NS方向	EW方向	UD方向	NS方向	EW方向	UD方向		
Ss-1	F-B断層	应 基	答スペクトルに づく地震動評価	23	00	1050	1050		650
Ss-2	による地震	断層 1 に	Eデルを用いた手法 よる地震動評価	1240	1703	711	848	1209	466
Ss—3		応答スペクトル に基づく地震動 評価	応力降下量1.5倍及び断層傾 斜角35°ケースを包絡	600		400 6		600 4	
Ss-4	長岡平野西		応力降下量1.5倍	589	574	314	428	826	332
Ss-5	縁断層帯に よる地震	断層モデルを用	断層傾斜角35°	553	554	266	426	664	346
Ss-6	5	地震動評価	連動十応力降下量1.5倍	510	583	313	434	864	361
Ss-7			連動+断層傾斜角35°	570	557	319	389	780	349
Ss-8	2004年	-	-	-	65	50	330		

【基準地震動の最大加速度値】

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-1 時刻歴波形

荒浜側

東京電力

θ

TRACO



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-2 時刻歴波形

荒浜側

東京電力

θ

TERCO



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-3 時刻歴波形

荒浜側

東京電力

θ

TERCO



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-4 時刻歴波形

荒浜側

東京電力

θ



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-5 時刻歴波形

荒浜側

東京電力

θ



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-6 時刻歴波形

荒浜側

東京電力

θ



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-7 時刻歴波形

荒浜側

東京電力

θ



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-1 時刻歴波形

大湊側

東京電力

θ

TERCO



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-2 時刻歴波形

大湊側

東京電力

θ

TERCO



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-3 時刻歴波形

大湊側 ※荒浜側と共通



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

東京電力

θ

TERCO

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-4 時刻歴波形

大湊側

東京電力

θ

TERCO



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-5 時刻歴波形

大湊側

東京電力

θ



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-6 時刻歴波形

大湊側

東京電力

θ

TERCO



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-7 時刻歴波形

大湊側

東京電力

θ



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について 基準地震動Ss-8 時刻歴波形

大湊側

東京電力

θ

TERCO



速度波形:加速度時刻歴波形でO線補正後,1回積分

- 1. はぎとり地盤モデルにおける密度の設定について
- 2. 吉田ほか(2005)を踏まえた検討について
- 3. 長岡平野西縁断層帯による地震の評価結果について
- 4. 2004年北海道留萌支庁南部地震の評価について
- 5. 基準地震動Ssの時刻歴波形について
- 6. 確率論的地震ハザードの評価内容について



6. 確率論的地震ハザードの評価内容について 評価方針

社団法人日本原子力学会「原子力発電所の地震を起因とした確率論的安全評価実施基準:2007」に基づき、 評価を実施。

■ 特定震源モデルの設定

- ・特定震源については、以下の5種類に分類してモデル化する。
 ①サイトから30km程度の範囲内の震源モデル
 ②サイトから30km程度以遠の震源モデル
 ③日本海東縁部に想定される震源モデル
 ④確率論的津波ハザード評価で考慮している震源モデル
 ⑤敷地への影響が大きい活断層の連動を考慮した震源モデル
- 領域震源モデルの設定
 - ・垣見ほか(2003)の領域区分を参照し、敷地から半径150km以内の領域を対象とする。
 - ・地震規模と地震発生頻度はG-R式を用いて設定し、各領域の最大Mは領域内の過去の地震の最大値だけでなく、 島崎(2009)の知見も考慮する。
- 地震動伝播モデルの設定
 - Noda et al.(2002)による距離減衰式を用いる。
 - ・海域の地震と陸域の地震に対してそれぞれ補正係数を考慮し、ロジックツリーにおいて観測記録に基づく補正の有無を考慮する。
- ロジックツリーの作成
 - ・確率論的地震ハザードに大きな影響を及ぼす認識論的不確かさを選定しロジックツリーを作成する。
 - ・敷地への影響が大きい活断層の連動を考慮した震源モデルについては、詳細なロジックツリーにより評価する。



6. 確率論的地震ハザードの評価内容について 震源モデルの設定 特定震源モデル

①サイトから30km程度の範囲内の震源モデル

- 断層の諸元は地質調査結果に基づき設定。
- 平均活動間隔は地震本部(2009)の知見に基づき設定。F-B断層については、地震本部(2003)における日本海東縁部の長期評価を参考に設定。平均活動間隔が不明なものについては、断層変位量と平均変位速度から算定。
- 断層変位量 : D = 10^{0.6M-4.0} 平均変位速度: 0.5mm/年(活動度はB級と仮定)
- 発生確率モデルは地震本部(2009)の知見に基づき設定。また、調査等により最新活動時期が推定されたものはBPT 分布を用い、最新活動時期が不明なものは、ポアソン分布を用いる。

地質調査結果に基づく敷地周辺の活断層分布

复京電力

No.	特定震源の名称	分類	也震 規模 ^{※1}	等価震源 荒浜	距離(km) 大湊	平均活動 間隔(年)	発生確率 モデル
1	佐渡島棚東縁部断層		6.8	55	53	5500	ポアソン
2	F-B断層		7.0	13	13	1000	BPT
3	佐渡島南方断層	海域	6.9	23	22	4700	ポアソン
4	F-D断層	(調査) 結果)	6.9	35	36	4700	ポアソン
5	高田沖断層		6.8	61	63	4100	ポアソン
—	親不知海脚西縁断層帯~魚津断層帯		7.5	94	96	8000	ポアソン
6	角田・弥彦断層		7.7	51	49	2450	ポアソン
\bigcirc	気比ノ宮断層		7.1	21	20	2450	ポアソン
8	片貝断層		6.8	14	14	2450	ポアソン
(13)	悠久山断層		6.8	27	26	5800	ポアソン
(14)	半蔵金付近のリニアメント	陸域	6.8	25	25	2300	ポアソン
(15)	柏崎平野南東縁のリニアメント	(調査	6.8	15	16	2300	ポアソン
(16)	山本山断層	結果)	6.8	21	21	2300	ポアソン
17	水上断層		6.8	15	16	2300	ポアソン
(18)	上米山断層		6.8	17	18	2300	ポアソン
(19)	雁海断層		6.8	17	18	2300	ポアソン
20			7.4	30	32	3300	ポアソン

海域の補正係数を用いる震源

陸域の補正係数を用いる震源

※1:海域の断層による地震のMは、2007年新潟県中越沖地震(M6.8)の知見を踏まえて設定した値を記載。 陸域の断層による地震のMは、松田(1975)に基づき設定。ただし、いずれも下限値は6.8としている。

地震本部の知見により推定した値

地震規模と活動度から算定した値

6. 確率論的地震ハザードの評価内容について 震源モデルの設定 特定震源モデル

②サイトから30km程度以遠の震源モデル

■ 断層の諸元, 平均活動間隔及び発生確率モデルは地震本部(2009, 2012)の知見に基づき設定。



陸域の補正係数	陸域の補正係数を用いる震源 地震本部の知見により推						
特定震源の名称	分類	地震 規模 ^{※1}	等価震源 荒浜	<u>距離(km)</u> 大湊	平均活動 間隔(年)	発生確率 モデル	
会津盆地西縁断層帯		7.4	102	101	8550	BPT	
会津盆地東縁断層帯		7.7	123	123	7800	BPT	
		6.9	99	97	3500	BPT	
月岡断層帯		7.3	67	66	7500	BPT	
関谷断層		7.5	113	113	3350	BPT	
平井-櫛挽断層帯 十日町断層帯東部 糸魚川-静岡構造線断層帯(北部・中部) 呉羽山断層帯		7.1	144	145	7300	ポアソン	
		7.0	41	42	6000	ポアソン	
		8.2	125	126	1000	BPT	
		7.3	150	151	4000	ポアソン	
六日町断層帯 北部(ケース1)		7.1	32	32	5400	ポアソン	
六日町断層帯 北部(ケース2)		7.1	28	28	3600	BPT	
六日町断層帯 南部 高田平野東縁断層帯		7.3	43	44	6700	BPT	
		7.2	42	44	2300	ポアソン	
高田平野西縁断層帯		7.3	52	53	3500	BPT	
長野盆地西縁断層帯		7.8	74	76	1650	BPT	

地震調査研究推進本部の主要活断層の分布

※1:地震のMは、松田(1975)に基づき設定。





③日本海東縁部に想定される震源モデル

断層の諸元,平均活動間隔及び発生確率モデルは地震本部(2009)の知見に基づき設定。



日本海東縁部の特定震源

海域の補正係数を用いる震源

地震本部の知見により推定した値

特定震源の名称		分類	也震 規模 ^{※1}	<u>等価震源</u> 荒浜	<u>距離(km)</u> 大湊	平均活動 間隔(年)	発生確率 モデル
利日日子	東傾斜		7.5	258	257	1000	ポアソン
	西傾斜		7.5	259	257	1000	ポアソン
山形県沖			7.7	169	167	1000	BPT
新潟県北部沖		7.5	117	116	1000	BPT	
			7.8	235	233	750	ポアソン
	東傾斜	海	7.8	199	197	750	モデル ポアソン BPT BPT ポアソン ポアソン
		東	7.8	148	147	750	ポアソン
佐波島北万冲		縁	7.8	235	234	750	ポアソン
	西傾斜	바	7.8	199	198	750	ポアソン
			7.8	149	147	750	ポアソン
佐渡島北方沖~ 北海道西方沖		8.4	280	278	3900	ポアソン	

④確率論的津波ハザード評価で考慮してい る震源モデル

断層の諸元,平均活動間隔及び発生確率モデルは 確率論的津波ハザード評価より引用。



確率論的津波ハザード評価で考慮している断層面(想定D断層)

海域の補正係数を用いる震源

地震規模と活動度から算定した値

特定震源の名称	分類	地震	等価震源	距離(km)	平均活動	発生確率	
	73 75	規模※1	荒浜	大湊	間隔(年)	モデル	
想定D断層による 地震	想定D	8.0	74	75	25000	ポアソン	

※1:佐渡島北方沖~北海道西方沖(連動)及び想定D断層による地震のMはMwの値を 使用。その他の地震のMは地震本部に基づき設定。

6. 確率論的地震ハザードの評価内容について 震源モデルの設定 特定震源モデル

⑤敷地への影響が大きい活断層の連動を考慮した震源モデル

断層の諸元は地質調査結果に基づき設定。

平均活動間隔は、①で設定した活動間隔の長い断層に合わせる。ただし、長岡平野西縁断層帯及びF-B断層との連動 を考慮する場合は、それぞれ両者の活動間隔及び発生確率モデルに従うこととする。

海域の補正係数を用いる震源 陸域の補正係数を用いる震源 N А. 発生確率 批震 等価震源距離(km) 平均活動 震源の組み合わせ 分類 規模※1 間隔(年) モデル 荒浜 大湊 角田弥彦 Ð ポアソン 角田弥彦~気比ノ宮 7.9 34 32 2450 新層 佐渡島南方断層 気比ノ宮~片貝 74 16 15 2450 ポアソン 角田弥彦~気比ノ宮 陸域 8.1 25 25 2450 ポアソン (長岡平野西縁断層帯) 連動 wa ken 長岡平野~十日町断層帯西部 26 26 2450 ポアソン 8.4 長岡平野~長野盆地 86 31 31 1650*2 BPT F-D~高田沖 7.3 42 43 ポアソン 4700 F-B断層 気比ノ宮 佐渡海盆※3~F-B 7.2 15 15 1000 BPT F-D断層 断層 F-B~佐渡島南方 7.4 16 16 1000 BPT 77 20 1000 BPT F-B~F-D~高田沖 20 片貝断層 柏崎刈羽 31 31 ポアソン 佐渡島南方~F-D~高田沖 76 4700 原子力発電所 F-D~高田沖~親不知~魚津 7.9 57 58 8000 ポアソン 高田沖断層 79 21 F-B~佐渡島南方~F-D~高田沖 20 1000 BPT 佐渡海盆*3~F-B~佐渡島南方~ Rita 海域 7.9 21 21 1000 BPT F-D~高田沖 十日町 連動 親不知海脚西縁断層 F-B~F-D~高田沖~親不知~ 新層帯西部 8.0 26 26 1000 BPT 鱼津 佐渡島南方~F-D~高田沖~ 8.0 41 40 8000 ポアソン 親不知~魚津 魚津断層帯 F-B~佐渡島南方~F-D~ 8.0 25 1000 BPT 26 高田沖~親不知~魚津 佐渡海盆^{※3}~F-B~佐渡島南方~ BPT 8.1 26 25 1000 長野盆地西縁断層帯 F-D~高田沖~親不知~魚津 ※1:陸域の断層による地震のMは、松田(1975)に基づき設定した値を記載。 海域の断層による地震のMは、2007年新潟県中越沖地震(M6.8)の知見を踏まえて設定。 30 (km) 20 30 100 8/0 ※2:長野盆地西縁断層帯の平均活動間隔は地震本部の知見に基づき設定。 ※3:佐渡海盆東縁断層は、地質調査結果からは活断層とは認められないものの、ハザード評価上は考慮 連動を考慮する断層 することとする。 東京電力

64

6. 確率論的地震ハザードの評価内容について 震源モデルの設定 領域震源モデル



- 敷地が位置する日本海東縁変動帯(領域13)については、地震動レベルの要因 分析結果及び地質調査の内容を考慮した領域区分を設定。
- 地震発生頻度は宇津カタログ及び気象庁地震カタログのデータに基づき、G-R式を用いて設定。
- 最大Mは、各領域で過去に発生した地震のうち、特定震源として考慮している地震を除いた地震の最大規模とし、その値に幅がある場合は、中央値、上限値、下限値をロジックツリーの分岐として考慮する。また、島崎(2009)によれば、M7.0~7.1以下の範囲で活断層として表現されない地震が存在すること、短い活断層で発生する地震のMの上限が7.4程度であるとされていることから、これらの知見についてもロジックツリーの分岐として考慮する。





日本海東縁変動帯の領域区分の考え方

海域の補正係数を用いる震源

陸域の補正係数を用いる震源

ſ	地震地	地震地体構造区分				₽★М	
Į	垣見る	まか(2003)	年発生頻度	b値	最大M	風へい	備考
	領域	領域名	(M5以上)	<u>j</u>	歴史地震	(2009)	
	8B	東北日本弧外帯	0.4799	0.8525	6.8	7.1,7.4	
	8C	東北日本弧内帯	0.7496	0.8146	7.2	7.1,7.4	
	10B1	関東主部	0.6428	0.8147	7.0,7.3	7.1,7.4	
	10C1	能登	0.1180	0.7061	6.9,7.0	7.1,7.4	
	10C2	中部山岳	0.6305	0.8665	7.0,7.3	7.1,7.4	
	10D1	能登·若狭沖海域	0.1281	1.0901	6.8	7.1,7.4	
	13L		0.0545	0.9341	7.0,7.2, 7.4	7.1,7.4	陸側−外
	13 L_R	日本海東縁	0.0476	0.9341	6.7	—	陸側-内
	13 S	変動帯	0.3412	0.9341	7.0	7.1,7.4	海側-外
	13S_R		0.0343	0.9341	6.7	_	海側-内

※13Lと13L_R, 及び13Sと13S_Rについては、それぞれ区分しない分岐も考慮する。



6. 確率論的地震ハザードの評価内容について 地震動伝播モデルの設定 陸域・海域の補正係数

------ 平均値 ----- 標準偏差(±1σ)



注) メカニズム解は, No.1, No.2はThe Global CMT Project, No.3以降はF-netによる。

東京電力

No	必 重日	登雪日口 地震				₹ (cm/	(cm/s^2)		
110.	九辰月		規模	荒浜	荒浜側		則		
1	1993. 02. 07	22: 27	6.6	20.6 26.0	0	13.5 17.3	0		
2	1995. 04. 01	12: 49	5.6	4.8 3.7		5.8 5.4			
3	2004. 10. 23	17: 56	6.8	_		52.8 84.7			
4	2004. 10. 23	18: 03	6.3	—		30.6 41.1			
5	2004. 10. 23	18: 07	5.7	_		16.7 16.4			
6	2004. 10. 23	18: 11	6.0	_		28.8 60.3			
7	2004. 10. 23	18: 34	6.5	_		62.0 123.5			
8	2004. 10. 23	19: 45	5.7	13.7 19.8		17.1 16.8			
9	2004. 10. 25	06: 04	5.8	25.1 36.2		21.6 43.3			
10	2004. 10. 27	10: 40	6.1	28.8 39.2		28.7 56.0			
11	2004. 11. 08	11: 15	5.9	8.0 10.7		10.8 15.0			
12	2007. 03. 25	09: 41	6.9	51.5 34.4	0	19.4 13.9	0		
13	2007. 07. 16	15: 37	5.8	190.1 241.0	0	265.4 251.0	0		

- 注 1) 最大加速度は上段がNS成分, 下段がEW成分(解放基盤表面)
 - 2)最大加速度の数値の右側の記号は、 〇は海域の補正係数の算定に用いた地震 口は陸域の補正係数の算定に用いた地震
 - 3)陸域の補正係数は、荒浜側(5地震)と 大湊側(10地震)の平均



66

確率論的地震ハザードの評価内容について 6. ロジックツリーの作成

■ 震源モデルおよび地震動伝播モデルの設定における認識論的不確かさのうち、確率論的地震ハザード評 価へ及ぼす影響が大きい要因を選定。

■特に、敷地に影響を及ぼすと考えられる活断層の連動については、詳細なロジックツリーにより評価。



6. 確率論的地震ハザードの評価内容について ロジックツリー【陸域連動】

■陸域の連動については、震源の組み合わせを考慮したロジックツリーを作成して評価する。



6. 確率論的地震ハザードの評価内容について ロジックツリー【海域連動】

■海域の連動については、震源の組み合わせを考慮したロジックツリーを作成して評価する。



連動に関する分岐

①各セグメントが常に個別に活動
②F-D断層,高田沖断層は常に個別,F-B断層+佐渡島南方断層は連動
③F-D断層+高田沖断層は常に連動,F-B断層,佐渡島南方断層は常に個別に活動
④F-D断層+高田沖断層は連動,その他は常に個別に活動
⑥F-D断層+高田沖断層は連動,F-B断層+佐渡島南方断層は連動
⑦高田沖断層+F-D断層+F-B断層は連動,佐渡島南方断層は常に個別に活動
⑧高田沖断層+F-D断層+F-B断層は連動,F-B断層は連動,F-B断層は連動,F-B断層は常に個別に活動

- 注1) 親不知海脚西縁断層帯〜魚津断層帯はモ デル⑦〜⑨に対して連動する場合 (W=1/2)を考える。
- 注2) 佐渡海盆東縁断層については、活動を考 慮するケース(W=1/10) と活動を考慮 しないケース(W=9/10) を分岐として 設定し、活動を考慮する場合には、周辺 の断層と連動するケース(W=1/2) と連 動しないケース(W=1/2) を分岐として 設定する

6. 確率論的地震ハザードの評価内容について ロジックツリー【領域震源の例】

■ 敷地至近の領域震源においては、半径30kmの領域を区分する場合としない場合の分岐を設定して評価。





注)この領域では歴史地震の最小値、中央値、最大値が同じ値。また、距離減衰式及びばらつきに関する分岐は特定震源と同様






6. 確率論的地震ハザードの評価内容について 平均ハザード曲線・震源ごとの寄与率 大湊側

复京電力



確率論的地震ハザードの評価内容について 6. ー様ハザードスペクトル 荒浜側

基準地震動Ss-1~7

との比較

基準地震動Ss-1~7の応答スペクトルと一様ハザードスペクトルとを比較す ると、基準地震動の上限レベルの年超過確率は、水平方向・鉛直方向ともに 10-4~10-5程度となっている。

(一様ハザードスペクトルは平均フラクタイルハザードに基づいた評価)



確率論的地震ハザードの評価内容について 6. ー様ハザードスペクトル 大湊側

との比較

大湊側

基準地震動Ss-1~7の応答スペクトルと一様ハザードスペクトルとを比較す 基準地震動Ss-1~7 ると、基準地震動の上限レベルの年超過確率は、水平方向・鉛直方向ともに 10-4~10-5程度となっている。

(一様ハザードスペクトルは平均フラクタイルハザードに基づいた評価)



6. 確率論的地震ハザードの評価内容について 一様ハザードスペクトル



6. 確率論的地震ハザードの評価内容について 地震規模の設定に関する感度解析 概要

- 一様ハザードスペクトルへの寄与率が大きい陸域及び海域の活断層の連動を考慮した震源モデルを対象に、 断層面積から地震規模を算出した場合の分岐を取り入れ、評価結果へ与える影響について検討する。
- 松田式により地震規模を算出する方法を、断層面積から算出する方法に変更する。
- 断層面積から地震規模を算出する式は入倉・三宅(2001)及び武村(1990)を用いる。ただし、一部の長 大断層の地震モーメントの算出には、スケーリング則を考慮し、Murotani et al.(2010)を用いる。



6. 確率論的地震ハザードの評価内容について 地震規模の設定に関する感度解析 解析結果

TERCO

■ 地震規模の算出方法に関する分岐を見直した結果、一様ハザードスペクトルは現状の評価よりも小さくなること を確認した。また、地震規模の算出方法が一様ハザードスペクトルへ与える影響は小さいことを確認した。

評価結果が小さくなった要因としては、断層面積から地震規模を算出した場合、現状評価で用いている松 田式によって算出した値に比べて、地震規模が概ね小さく算出されるためだと考えられる。



参考文献

- Murotani, S., S. Matsushima, T. Azuma, K. Irikura, S. Kitagawa (2010) : Scaling relations of earthquakes on inland active mega-fault systems, 2010 AGU Fall Meeting, S51A-1911.
- Noda, S., K. Yashiro, K. Takahashi, M. Takemura, S. Ohno, M. Tohdo, and T. Watanabe (2002) : RESPONSE SPECTRA FOR DESIGN PURPOSE OF STIFF STRUCTURES ON ROCK SITES, OECD-NEA Workshop on the Relations between Seismological DATA and Seismic Engineering, Oct. 16-18, Istanbul
- The Global CMT Project, http://www.globalcmt.org/
- ・入倉孝次郎,三宅弘恵(2001):シナリオ地震の強震動評価,地学雑誌,110
- ・宇津徳治(1982):日本付近のM6.0以上の地震および被害地震の表:1885年~1980年,東京大学地震研究所彙報,第57巻
- ・宇津徳治(1985):日本付近のM6.0以上の地震および被害地震の表:1885年~1980年(訂正と追加),東京大学地震研究所彙報,第60巻 ・垣見俊弘,松田時彦,相田勇,衣笠善博(2003):日本列島と周辺海域の地震地体構造区分,地震 第2輯,第55巻
- ・垣兄後辺,松田時彦,柏田男,松立苔侍(2003)。日本列島と周辺海域の地震地体構造区力,地震 第2輯,第53巻 ・加藤研一,宮腰勝義,武村雅之,井上大榮,上田圭一,壇一男(2004):震源を事前に特定できない内陸地殻内地震による地震動レベル 一地質学 的調査による地震の分類と強震観測記録に基づく上限レベルの検討一,日本地震工学会論文集,第4巻,第4号
- ・神原浩,松島信一,早川崇,福喜多輝(2006):2004年新潟県中越地震の余震観測記録に基づく本震時の震源域の強震動推定,清水建設研究報告 第83号
- ・気象庁:地震年報2011年版,地震・火山月報ほか
- ・佐藤浩章,芝良昭,東貞成,功刀卓,前田宜浩,藤原広行(2013):物理探査・室内試験に基づく2004年留萌支庁南部の地震によるK-NET港町観 測点(HKD020)の基盤地震動とサイト特性評価,電力中央研究所報告,研究報告:N13007
- ・笹谷努,前田宜浩,高井伸雄,重藤迪子,堀田淳,関克郎,野本真吾(2008):Mj6.1 内陸地殻内地震によって大加速度を観測したK-ET(HKD020) 地点でのS波速度構造の推定,物理探査学会第119回,学術講演会講演論文集,pp.25-27.
- ・武村雅之(1990):日本列島およびその周辺地域に起こる浅発地震のマグニチュードと地震モーメントの関係、地震 第2輯 第43巻
- ・地震調査研究推進本部(2003):日本海東縁部の地震活動の長期評価について、地震調査委員会資料
- ・地震調査研究推進本部(2012):今後の地震動ハザード評価に関する検討 ~2011年・2012年における検討結果~
- 地震調查研究推進本部(2009):「全国地震動予測地図」報告書
- ・島崎邦彦(2009): 地震と活断層: その関係を捉え直す, 科学, Vol79, No.2
- ・社団法人日本原子力学会(2007):原子力発電所の地震を起因とした確率論的安全評価実施基準,日本原子力学会標準,AESJ-SC-P006
- 社団法人日本電気協会原子力規格委員会(2008):原子力発電所耐震設計技術指針(JEAG4601-2008)
- ・第279回原子力発電所の新規制基準適合性に係る審査会合 資料1 柏崎刈羽原子力発電所6号炉及び7号炉 基準地震動の策定について コメント回答 http://www.nsr.go.jp/data/000124919.pdf
- •独立行政法人 防災科学技術研究所: 強震観測網(K-NET, KiK-net), http://www.kyoshin.bosai.go.jp/
- •独立行政法人 防災科学技術研究所:広帯域地震観測網(F-net), http://www.fnet.bosai.go.jp/
- ・松田時彦(1975):活断層から発生する地震の規模と周期について、地震 第2輯,第28巻
- ・吉田望, 篠原秀明, 澤田純男, 中村晋:設計用地震動の設定おける工学的基盤の意義, 土木学会地震工学論文集, 第28巻

